

生徒が主体的になれる体育授業づくりへの試作

— 中学 2 年生を対象にしたワンバウンドバレーボールから —

江尻沙和香¹⁾、湯口 雅史²⁾、木原 資裕³⁾

(キーワード：主体的、本質的なおもしろさ、ネット型、ワンバウンドバレーボール、攻防)

1. はじめに

近年、急激な時代の変化に伴い、現代の学校教育は、その変化に順応していく力が求められている。中学校学習指導要領(2018)では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」とある。また、教育課程の実施と学習評価に関しては、「主体的・対話的で深い学びの実現へ向けた授業改善」が求められ、生徒の主体性を重視した内容が定められている。さらに、「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編(2018)では、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」とあり、体育授業において、生徒の主体性の言及が求められていることは言うまでもない。主体的な学びとは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次に繋げる」こととされている(文部科学省 2017)。このような学びが期待されているが、筆者の考える体育授業実践の問題点として、以下の事項が挙げられる。①球技の單元ではゴール型、ネット型、ベースボール型、をバランス良く取り組めていない。②授業準備に時間がかかってしまい、作戦立てなどの話し合いの時間が多く、生徒の運動量が確保できていないことがある。③評価の実態としては、スキルテストの結果のみでの評価が多く、運動を苦手とする生徒のモチベーションが上がらない。これらの課題は、教師の授業マネジメントによるものであり、その改善の方向性として「生徒全員が主体的にゲームに参加できる」ことを考える必要がある。筆者は体育授業において主体性を育てるためには、教師から与えられた課題に一方的に取り組むだけでなく、生徒自身が自ら課題解決へ向かって学びを進めていけるような授業づくりをし

たいと考えた。生徒が自ら課題を発見し、こだわりを持った課題解決へ向かうために、「運動の本質的なおもしろさ」に触れることを必要としており、運動の本質的なおもしろさとは、「その運動が固有に持ってあり、誰にも共通する、運動の中心のおもしろさ(文化の中心的活動)」と設定している(松田、2016；第 63 回全国体育学習研究協議会四日市・三重郡大会実行委員会、2018)。また、生徒が運動に対して苦手意識を持たないような授業づくりを前提とし、ルール・教具・場に工夫を取り入れる必要があると考えた。

上記のような問題意識を持ちつつ、今回、N 中学校において、課題探求授業として 1 時間(100 分)限定のワンバウンドバレーボールの授業実践を行う機会を得た。そこで、生徒が主体的に授業に参加する体育を意図したルール・教具・場を考慮した授業実践を行った。ここに実践内容と課題を報告する。

2. バレーボール授業の課題

ネット型は、ほとんどの中学校の体育授業で取り扱われている。中学校学習指導要領(2018)では、ネット型の目標として中学校第 1 学年及び第 2 学年において「ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること」第 3 学年では、「役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること」と掲げられている。このような目標及び内容を具体化するためには、「攻防を展開すること」を前提として、生徒達が自ら課題解決へ向かえるような授業づくりが必要である。筆者は、文献を参考に、ネット型の本質的なおもしろさを「相手コートにボールを落とすか自コートに落とさせないか」と設定した(松田、2016；徳島県小学校体育連盟研修部、2019)。

筆者は、中学生と高校生にバレーボール授業実践を行ってきたが、ほとんどの單元展開が「スキル練習から

¹⁾ 鳴門教育大学大学院 芸術・体育系教科実践高度化コース(保健体育)

²⁾ 鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教科系)

³⁾ 鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教科系)名誉教授

試合へ、試合からスキルテスト」であった。スキル練習時には得意な生徒はどんどん上達していき、不得意な生徒は「やらされている感」が出ており、何も上達しないまま試合期に入るという状況である。ゲームはオフィシャルルールで行うことが多かったため、得意な生徒にボールが集まり、不得意な生徒はあまり目立たず運動量も少ないまま終わってしまう傾向であった。鈴木(2015)によると、球技は比較の人気のある領域と言われているが、試合にほとんど関われない生徒がいるという現実がある。例えば、ボールに全然触れたことがない、得点したこともない、何もできずに隅っこで立っただけということである。また、中村・滝澤(2019)によれば、バレーボールの競技特性上、初心者にとって非常に困難な技術を伴う種目であり、限られた授業時数の中で攻防を課題とするゲームができるようになることは難しいのが実態である。

2. 1. オフィシャルコートでゲームを行うと、サーブの正否で勝敗が決まる。

エンドラインからサーブを打つと相手コートまで届かない生徒が複数いるので、サーブミスで相手に点数が入ってしまう。また、1本目のレシーブがミスになる確率が高く、サーブがやっと入っても繋がらない。レシーブする際に腕の痛みやボールの落下地点に入る恐怖心があり消極的になってしまう生徒も多数いるとされている

(永谷・工藤, 2017)。

2. 2. レシーブからトスができない。

レシーブが何とか上がってもセッター方向への返球が難しく、アタッカーへのトスにならず、三段攻撃まで辿り着かない。

2. 3. 限られた生徒にボールが集まる。

意識的にバレーボール部や球技が得意な生徒中心にボールが経由することが多く、その他の生徒の運動量が少ないと感じる。

これらの問題点を踏まえ、「生徒が主体的にネット型の本質的なおもしろさに夢中になり課題解決に向かう」という授業目標を設定し、ルール・教具・場に工夫を取り入れた「ワンバウンドバレーボール」の授業実践を行った。

3. 授業実践

授業対象者はN中学校2年生28名(男子17名, 女子11名)であり、実施日は令和2年10月27日である。

本授業実践の目標を「生徒が主体的にネット型の本質的なおもしろさに夢中になり、課題解決に向かう」と設定し(表1)、以下のように取り組んだ。なお、今回の授業実践は事後に授業内容の検討を行うことを目的とし

表1 学習指導案

授業目標：生徒が主体的にネット型の本質的なおもしろさに夢中になり、課題解決へ向かうことができる。		
	生徒の活動	教師の働きかけ
導 入	1 本時に行うワンバウンドバレーボールのイメージづくり 1) 動画視聴	1 生徒がワンバウンドバレーボールのイメージづくりができているか確認 ・動画視聴後、生徒に動画を見た感想を聞く。
	2 ルール確認とチーム決め 1) ルール確認 ①1本目のみワンバウンド可。 ②サーブは入る位置からアンダーハンド。 ③15点先取。 ④ゲームは全員参加。 2) チーム決め 1 チーム4~5人, 6チーム編成。全チームフルでゲームができるよう3コート作成。	2 パワーポイントにて説明 ・全試合、必ず、全員が試合へ参加することを強調する。
展 開	3 コートごとに攻防のおもしろさ体験 1) 点数の無いゲーム形式を各コートで行う。 2) 終了後、各チーム作戦立て。	3 攻防へ繋がるよう取り組んでいるか観察 ・攻防へ繋がるよう「三段攻撃」を意識するよう声かけをする。 ・生徒達が「三段攻撃」を意識できていない様子であれば、生徒を集め、もう1度動画を視聴させる。 ・終了後、各チーム作戦立ての際、ポジション・役割決めヒントとなるような助言をする。
	4 ゲーム ①全チーム3試合行う。 ②ゲーム間は、各チームで反省や次の試合の作戦立てを話し合う。	4 ゲームを観察 ・ポジションや役割に迷いが生じているチームには助言をする。また、試合間の話し合いの際、各チームへ攻防に夢中になれるよう助言する。
ま と め	5 まとめ 1) 振り返りシート記入 2) 本時のまとめ	5 本時のまとめ ・振り返りシートはできるだけ詳しく記載するよう声かけをする。

て、学校長の許可を得て、デジタルビデオ（SONY HDR-CX590V）で撮影した。更に、授業終了前に振り返りシートに配布し、生徒に記入させた。

3. 1. ルール・教具・場の工夫

3. 1. 1. ルールの工夫

「相手コートから飛んでくるボールに対して、ワンバウンドも可」とした。ワンバウンドで対応できるため、レシーブが安定する。また、レシーブ、トス、スパイクという三段攻撃に繋がりがやすくなる。また、全員で攻防が期待できる（図1～図4）。

サーブは確実に入れるために、「サーブは自分達の入れやすい位置からアンダーハンドで入れる」とした。また、レシーブ側にとって、下から緩やかに打たれたサーブは対応しやすいので、攻防の展開に繋がると考えた（図5、図6）。

3. 1. 2. 教具の工夫

ボールは、大きく柔らかく弾む「フラバールバレー用ボール」を自作し、使用した。強く当たってもそれほど痛みを伴わず、攻防中の恐怖感がなくなる。またフラバールバレーボールは図7のように楕円形をしており、バウンドさせた場合、少しイレギュラーを起こすため、ワンバウンドでも緊張感を持たすことができる。

3. 1. 3. 教具の工夫

コートは、バドミントンコートを使用し、ネットの高さは150cmに設定した。4～5人のチーム構成なので攻防がしやすくなる。また、生徒全員の運動量確保のため、3コート作り全員がフルで試合に参加した（図8）。

3. 2. 授業の実際

ゲームは、A・B・Cコートで各3試合、計9試合行ったが撮影カメラ位置の関係で、Aコートで実施された3試合に着目した。その試合動画を分析し、各試合のラリー回数及び、試合内容を表2と表3にまとめた。



図1 ワンバウンド



図2 ワンバウンドからレシーブ



図3 トス



図4 スパイク



図5 サーブ①



図6 サーブ②



図7 実際に使用したボール



図8 実際のコート

表2 ラリー表

① 1試合目

ラリー回数	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	8回
実行数	5	3	3	5	1	3	1	2
全体における割合	21.7%	13.0%	13.0%	21.7%	4.3%	13.0%	4.3%	8.7%

② 2試合目

ラリー回数	0回	1回	2回	3回	5回	6回	10回
実行数	6	6	3	2	1	2	1
全体における割合	28.6%	28.6%	14.3%	9.5%	4.8%	9.5%	4.8%

③ 3試合目

ラリー回数	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	14回
実行数	7	5	5	4	2	1	1	2	1
全体における割合	25.0%	17.9%	17.9%	14.3%	7.1%	3.6%	3.6%	7.1%	3.6%

表3 ゲームの記録

		1試合目				2試合目				3試合目			
対戦チーム		A		B		A		C		D		E	
試合結果		15		7		15		6		15		12	
ボール接触回数 (回)	男子 A1	30	男子 B1	48	男子 A1	23	男子 C1	22	男子 D1	35	男子 E1	42	
	男子 A2	25	男子 B2	27	男子 A2	12	男子 C2	19	男子 D2	29	男子 E2	28	
	女子 A3	15	女子 B3	17	女子 A3	14	男子 C3	18	男子 D3	18	男子 E3	22	
	女子 A4	14	女子 B4	11	女子 A4	12	女子 C4	15	女子 D4	13	女子 E4	22	
	男子 A5	12			男子 A5	11			女子 D5	10	男子 E5	14	
	平均	19.2	平均	25.8	平均	14.4	平均	18.5	平均	21.0	平均	25.6	
サーブ (回)	打数	10		13		12		9		14		14	
	ミス	1		1		0		0		2		1	
レシーブ (回)	レシーブ回数	38		36		28		26		31		49	
	ワンバウンド回数	20		11		18		7		15		21	
	ミス	2		6		4		6		3		4	
	両手対応	20		21		13		12		20		24	
トス	片手対応	18		15		15		14		11		25	
	トス回数(回)	13		11		11		10		13		20	
	両手対応(回)	6		5		4		5		12		9	
	片手対応(回)	7		6		7		5		1		11	
	レシーブから トスへの割合(%)	34.2%		30.6%		39.3%		38.5%		41.9%		40.8%	
スパイク (回)	打数	23		12		17		11		27		18	
	ポイント	2		0		8		2		4		0	
	ミス	2		2		0		4		3		3	
ブロック (回)	ブロック	0		13		0		5		12		0	
	ポイント	0		1		0		0		0		0	
レシーブ からの 接触回数 (回)	1本返し (内ダイレクトスパイク)	4 (2)	6 (4)	0 (0)	11 (5)	11 (9)	7 (0)						
	2本返し (内2本目スパイク)	19 (13)	12 (3)	16 (11)	3 (0)	13 (7)	17 (11)						
	3本返し (内三段攻撃)	10 (8)	9 (5)	9 (6)	10 (6)	12 (11)	14 (7)						

4. 授業の振り返り

4. 1 バレーボールの授業課題に対して

バレーボールの授業では、中学校1～3年生まで共通で、「攻防を展開すること」が目標とされており、ネット型の本質的なおもしろさを、先述したように「相手コートにボールを落とすか、自コートに落とさせないか」と設定し、本実践では、生徒が主体性を持てる授業づくりのためにルール・教具・場の工夫を行った。前述の「2バレーボール授業の課題」に対し、どのように実践できたのか、以下に検討する。

4. 1. 1. オフィシャルコートでゲームを行うと、サーブの正否で試合の勝敗が決まる

表3より、全チームのサーブミスの本数が2本以内でとどまっている。これは、サーブを打つ位置を生徒自身に委ねたこと、バドミントンコートという狭い場にしたこと、ボールが柔らかいため、生徒が思いっきり打てたことで実現している。また、ラリー回数(表2)のデータから、ラリーが1回以上続いた割合が、1試合78.3%、2試合目が71.4%、3試合目が75.0%であった。この要因としては、試合内容データ(表3)から、レシーブ回数に対し、レシーブミスの割合が全チーム25%以下で抑えられたことがラリー展開へ大きく繋がったと考えられる。レシーブミスが少なく抑えられたのは、1本目のボールはワンバウンド可としたことで、筆者のねらいとしていた安定した状態でレシーブに入ることができたからである。試合内容データ(表3)から、ワンバウンドの回数が多いチームほど、レシーブミスが少なかったことが分かる。また、「レシーブ=両手で組んで行う」というイメージが強いが、両手でコントロールが難しいと感じた生徒は自然と片手で手の平を使って対応しようという技術の選択肢が広がった。ボールが柔らかいから可能なプレーだと考えた。このように、ボールの特性が変わったことで、生徒がレシーブで必要とする技能の変化が見られた。

4. 1. 2. レシーブからトスができない

トスが上げられない原因として、レシーブが安定しないと、トスへ移行していけない。前述の「2バレーボール授業の課題」にもあるように、やっとレシーブが上がっても、トスを上げられる位置へ返球が少ないこと、トス技術がなかなか身に付かないことから、三段攻撃まで辿り着けないということが多い。表3より、今回は前述したように、全体的にレシーブミスが少なかったことから、レシーブからトスへの割合が全チーム30%を超えた。特に2、3試合目の4チームは40%前後という割合だが、試合を進めていく中で、レシーブを安定させるための方法として、「ワンバウンドを使う」、「両手対応だけではなく、片手対応も使う」といった選択肢を広げ、レシー

ブからトスへ繋げていくことができたと考えられる。これに加え、表5から、「ポジション・役割」に関しての記載が2番目に多く、各自の役割(レシーブやトス)を定めて取り組んでいたことが読み取れる。筆者が実際の試合を見て、レシーブが安定した状態で緩やかに上がれば、トスの役割の生徒がボールの落下地点に入り、トスを高く上げることが可能であることが分かった。しかし、これも1本目のレシーブが上がるようになったから可能になったと考えられる。

4. 1. 3. 限られた生徒にボールが集まる

前述で示したバレーボール授業の課題にあるように、どうしても得意な生徒のボール接触回数が多く、不得意な生徒はボール接触が少ないまま終わってしまう傾向が強い。また、バレーボールというと、6人制や9人制の印象が強く存在していることから、その人数を参考に行われることがあるが、1チームの人数が多くなると、1人あたりのボール接触回数が少なくなってしまうので、できるだけ多くの接触回数を確保するためには、少人数制の採用を考えていく必要がある。

表3から、全チームの生徒のボール接触回数が10回を超え、各チームの平均は1番低いチームで144回、1番高いチームで258回となった。これは、全生徒が全試合に参加できるよう6チーム(4～5人で構成)作り、3コート作成したこと、得意な生徒・不得意な生徒に限らず自分の役割を見つけられるルール・教具・場であったことが大きく影響しており、生徒が積極的にボール接触へ向かうことができたと考えられる。

4. 1. 4. その他

生徒達のゲーム中の様子から、男女問わず、トスが上がればスパイクを思いきり打ちに行く姿、1本目のダイレクトスパイクや2本目でスパイクを打ちに行く姿が見え、全チームスパイク打数が10本を超えた。オフィシャルルールでゲームをした場合、1試合あたりのスパイク打数を考えると、10本を超えるということは減多にならない。今回の場の工夫で、ネットの高さを150cmに下げたことで、トスが上がれば、スパイクを打つ場面まで到達できることが分かり、そこから攻防ができるおもしろみが見えた。また、ゲームを行っていく中で、「レシーブは両手でおこなうもの」という固定観念に縛られず、片手対応に変える、相手のスパイクに対してブロックに立ってみる、更に、今回の生徒達のワンバウンドをしてからレシーブする姿を見た時、相手から来るボールに対し、自分から後方へ下がって引いてワンバウンドを待ってからレシーブするという体勢が見えた。このようなことは、指導者側から指示したわけではなく、ルール・教具・場の工夫により生徒の主体性が発現した事例と捉えることができる。

4. 2.

今回, 振り返りシートで, 以下の3点を項目とした(28人全員回答。(1), (2)複数回答可)。

- (1) 今回の授業で何を課題としましたか?
- (2) 課題解決に向けて, どのように取り組みましたか?
- (3) 本日の授業の満足度を10点満点中で表して下さい。

表4から, 「三段攻撃」を課題とした記載が多かった。筆者は, 授業冒頭で, バレーボールの攻防に関心を持たせるために動画視聴をさせている。更に, 「攻防を行うために三段攻撃をやってみよう」, 「1本目をワンバウンド有りとしたことで, 三段攻撃がしやすくなる」という言葉かけを行っている。このことから生徒達に「三段攻撃をするためにはどうしたら良いか」という部分に着目させることができた。また, 表5より, 課題へ向けた取り組みに関しては, 表5の1番記載が多かった「コミュニケーション」に関する記載の中では, 「呼びやすいあだ名を決めた」, 雰囲気を良くするための方法として, 「得点を取ったらハイタッチをした」など生徒の自発的な発想が挙げられた。2番目に記載が多かった「ポジション・役割」に関して, 筆者が授業の途中のアドバイスの中で,

ポジション・役割のヒントとなることをアドバイスしたことから, 生徒達が作戦を立てる見通しに繋がったのではないかと考える。

ワンバウンドバレーボールの授業満足度データ図9より, 1番低い点数が5点, 8点以上を付けた生徒の割合が男子生徒62.6%, 女子生徒75.0%という過半数を超える結果になった。これは, 各自のボール接触回数と攻防に夢中になったことが大きく影響しているのではないかと考えた。表3より, ボール接触回数が全員10回を超え, 50回近い生徒が数名おり, 全員がゲームに関わることができたと考えられる。表2より, 各ゲームのラリー回数を見てみると, 1回以上行われている割合が全試合70%を超え, 2試合目の最大ラリー回数が10回, 3試合目は14回という活発な攻防が行えた。

今回の満足度の点数が, 10点を付けた割合が男子生徒に比べ, 女子生徒の方が上回った。仮にルール・教具・場を全てオフィシャルで行った場合, 経験の浅い女子生徒は, ネットの高さやボールの硬さに対応できず, 前述で述べたバレーボールの問題点に直面し, ボールの接触回数が少なく, スパイクを打つ経験などないまま終了す

表4 質問(1)への回答

①三段攻撃に関する記載	18名
・三段攻撃をする。	12名
・ボールをできるだけ3回で繋ぐ。	3名
・三段攻撃を構成し, 強いスパイクを心がけた。	1名
・三段攻撃を意識する。	1名
・ボールをできるだけ落とさず三段攻撃をしっかりと構成して得点を狙う。	1名
②コミュニケーションに関する記載	16名
・コミュニケーションを取る。	13名
・話したことの無い者同士がいたので, チームワークを大切にしたい。	1名
・呼びやすいあだ名を決めた。	1名
・「自分が行く」意思表示をした。	1名
③サーブに関する記載	7名
・しっかりとサーブを打つ。	6名
・敵陣にサーブを入れる。	1名
④各自の役割に関する記載	6名
・ポジションを決める。	4名
・ポジション・役割を決め, それを基に行う。	1名
・1番効率の良いポジションや良いプレーができるよう意識した。	1名
⑤ワンバウンドに関する記載	2名
・できるだけワンバウンドを使って, 取りやすい状態を作る。	2名
⑥その他記載	5名
・ボールをコートの外に出さない。	3名
・確実にパスを繋ぐ。	1名
・楽しむ。	1名

表5 質問(2)への回答

①コミュニケーションに関する記載	15名
・声を出す, かけ合う。	6名
・仲間の名前を声に出す。	5名
・呼びやすいあだ名を決めた。	1名
・熱中していたため, コミュニケーションがあまり取れなかった。	1名
・得点を取ったら, ハイタッチなどした。	1名
・反省点など話し合った。	1名
②ポジション・役割に関する記載	10名
・ポジションごとに役割を決める。	7名
・ポジションを変えながら行う。	1名
・ポジションをバランス良く考えた。	1名
・前衛はトスとスパイク, 後衛はレシーブと決めた。	1名
③トスに関する記載	4名
・仲間の位置を把握した上でトスを上げた。	2名
・できるだけ膝を曲げて良い体勢で, 前衛が打ちやすいトスを上げた。	2名
④サーブに関する記載	2名
・サーブは冷静に打つ。	2名
⑤ワンバウンドに関する記載	3名
・ワンバウンドをよく見ながら取る。	3名
⑥その他記載	3名
・失敗から学ぶ。	1名
・遠慮しない。	1名
・みんなにボールが回るようにした。	1名

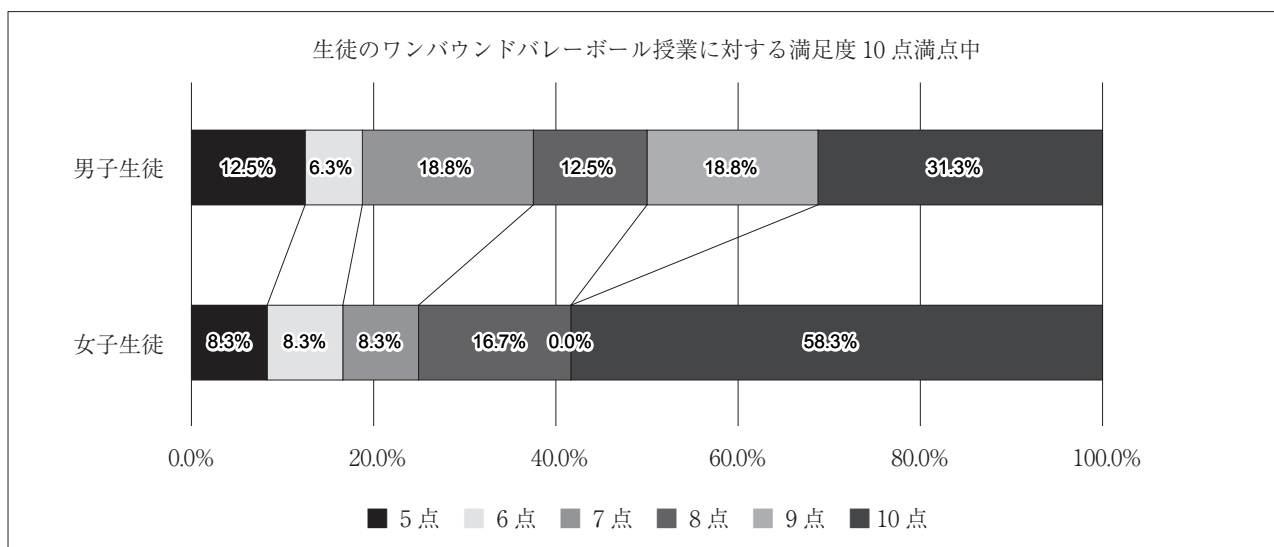


図9 授業満足度グラフ

ることが多い。しかし、今回は、ネットを150cmに設定、柔らかいボールを使用したことで、女子生徒が前衛を守ること、スパイクへ参加する様子が見られた。しかし、実際のゲーム様相は、特に男子生徒の打つスパイクのほとんどは真下に打ち付けるようなスパイクであり、得点に繋がるプレーだが、今回ワンバウンド可としたことで、そこから更にレシーブへ繋げ、攻防が続くという展開が行われていた。また、10点を付けた女子生徒の振り返りシートの中で、「チームワークを良くしようと励んだ」「点数を取ったら、ハイタッチなどをしてコミュニケーションが取れた」など雰囲気良くできた記載があった。これらのことから、女子生徒の高い満足度が得られたのではないかと考えた。

振り返りシートの記載の量を見てみると、男女共に満足点が高い生徒は、記載内容が非常に詳しく書かれており、授業中に課題へ向けて取り組んだ内容が見えるような記載であった。

5. 終わりに

齋藤(2008)は、生徒が「主体的」になるためには、学ぶ側の意識を高めるための準備が必要であり、「自分で自分を伸ばせるように仕向けていく」ことも大切だとしている。

今回の「ワンバウンドバレーボール」の授業実践では、筆者が「生徒が主体的にネット型の本質的なおもしろさに夢中になり、課題解決に向かう」と設定し、ルール・教材・場を揃えた。生徒の様子としては、課題解決に向け、ボールへの接触、生徒同士のコミュニケーションが活発であった。そこから、更に生徒自身から出てきた発想や選択肢の広がりがあり、それを実践に繋げられたことで、生徒が主体的になれた授業だったと考えられる。

このように生徒が主体的になれる場面を作ることで、生徒が今後、自ら目標を持ち、課題解決していく力が身に付く経験となるのではないかと考えた。

今回は100分という限られた時間で行ったが、通常の1単元の授業である場合、途中で慣れからの飽和が生じたり、生徒の主体性が薄くなる場面が出てくると思うが、その際にどのような変化を加えるべきか、どのようなアドバイスが必要か、今後の検討課題である。

さらに、授業の主役は生徒であり、生徒の課題解決能力が高まっていることを見取りながら、毎時間、主体的に取り組める授業づくりを今後も探っていきたい。

参考・引用文献

- 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示), 東山書房, pp.19 - 24, 2018.
- 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編, 東山書房, p.1, 2018.
- 新しい学習指導要領の考え方
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf (アクセス確認 2020. 10. 10).
- 松田恵示, 「遊び」から考える体育の学習指導, 創文企画, pp.9 - 25, 2016.
- 第63回全国体育学習研究協議会四日市・三重郡大会実行委員会, つみかさね, pp.33 - 35, 2018.
- 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示), 東山書房, pp.117 - 122, 2018.
- 松田恵示, 「遊び」から考える体育の学習指導, 創文企画, p.75, 2016.
- 徳島県小学校体育連盟研修部, 第57回中・四国小学校研究大会(徳島大会), 第61回徳島県小学校体育科教

育研究大会研究紀要, p.22, 2019.

鈴木秀人, 改めて体育における主体的な学習の在り方を考える, 保健体育ジャーナル 106 号, pp.1 - 4, 2015.

中村真由美・滝澤武: バレーボール授業におけるスキルテストの検討, 清泉女学院短期大学研究紀要第 38 号, pp.57 - 64, 2019.

永谷稔・工藤憲, 中高生を対象としたバレーボール授業におけるパス技術の指導方法について, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第 8 号, pp.107 - 115, 2017.

齋藤孝, 齋藤孝の相手を伸ばす! 教え力, 宝島社, p.41, 2008.